
鬼嫁～湯煙らない殺人鬼～

黒ウサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼嫁〜湯煙らない殺人鬼〜

【Nコード】

N9021Z

【作者名】

黒ウサギ

【あらすじ】

かつて、鬼と呼ばれる種族がいた。

頑丈にして屈強。その歯は岩をも砕き、その目は人ならざるものと人を区別できたそうだ。

やがて、鬼は緩やかに滅亡していったが、一部の鬼は人の交わり、その子孫は現代に生きている。

僕は湯治に來ただけなのに、なんでこんなことになっちゃったんだ？

湯の一

かつて、鬼と呼ばれる種族がいた。

頑丈にして屈強。その歯は岩をも砕き、その目は人ならざるものと人を区別できたそうだ。

やがて、鬼は緩やかに滅亡していったが、一部の鬼は人の交わり、その子孫は現代に生きている。

「巫山あゝ。いないのおゝ」

「……………」

息を殺し、埃っぽい小屋の中から外をうかがうと、ボサボサの髪を適当にくくった幼馴染み。犬塚夜知が僕を探していた。

「……………巫山。夜知が呼んでる」

僕の隣りで同じように息を殺して夜知を見ている女の子が遠回しに小屋から出ると言っている。

「いま出るのはマズインじゃないかな?!」

女の子は薄暗がりの小屋では良く見えないが、裸のように見える。

夜知に誤解されたら、いろいろと面倒だ。

そうこうしているうちに、夜知は小屋の戸を開けてしまった。

つまり、裸の女の子と幼馴染みが仲良く座っている小屋を見た。ということだ。

「あつ！ 巫山見つけ！ ……………ええええええ！！！」

ああ、空が青いな。

現実に連れ戻されたのは、夜知の叫び声を聞いた付近の大人たちが近づいてくる足音が聞こえてからだだった。

高校二年生の冬休み。

勉強に励めと言われた僕は何故かこの地に湯治に来ていた。

普段から骨折が三、四日で治る驚異的な生き意地の悪さを持つ僕だったが、たったひとりな幼馴染みから「巫山あゝ、たまにはお正月

を一緒に過ごそうよ。もちろん、お土産付きでね』

という電話があり、丁度コミケのなのはやゆるい激戦区を戦友に託してきた僕としては、人間関係を円滑にするために仕方なく、本当に仕方なく帰郷したというわけだ。

「巫山くんは親父さんそっくりね。特にその寝ぼけた顔とか死んだ魚のような目とか」

そんな、褒め言葉なのか嫌みなのか分からないことを言って、叔母さんは暖かく迎えてくれた。

「夜知。やーちー！ どこにいるのー！ 巫山くんが帰ってきたわよ！」

ドスンドスンと見た目に反して筋肉質な叔母さんは、僕の幼馴染み、犬塚夜知を探しに家の中に入っていった。

「まあまあ、巫山？ 見違えるように弱くなったねえ」

ニシシシと、後ろから女の子の音がする。まあ、見違えるように弱くなったと言う時点で誰かは分かっているのだが。

「飛鷹さん。僕の願いは普通の学校で普通の生活を普通にする事です。多少弱くなるのは当たり前でしょう」

飛鷹さん。彼女はすでに何百年も生きているが、この登場人物は十八歳以上です、みたいな中学生と見紛うような幼さの残る浴衣姿の女性だ。

ちなみに、彼女こそが僕が普通の生活をしたいという理由のひとつであり、何度も僕を殺そうとした人でもある。

「巫山。仮にも鬼なんだしさあ。人外の自覚を持ちなよ」

それだけ言うと、飛鷹さんは去っていった。

そう、僕の本名は朱鬼 巫山。

鬼の血を引く人間だ。

ちなみに、犬塚家は鬼の血を引いていない。

昔は朱鬼のお世話をする家だったらしいが、今ではすっかり仲良く漬け物や山菜料理を作る仲だ。

微笑ましい。

そういえば、たしか昔梅干しを作って小屋にしまっておいたんだっけ。

そして、小屋に入った僕は裸の女の子に鉢合わせし、出ようとしたら夜知が来たというわけだ。

湯の二

「巫山あ、何か言い訳でも？」
むー、と夜知は僕を睨みつけた。

隣りに座り、裸ではいろいろマズイので夜知の服を着ている女の子が言った。

「……………夜知も巫山も、ケンカはよくない」

「というか、あなたは何者？　ここは犬塚と真木、あとは鬼の血を引く人間以外入れないように不動明王の式神二十体と呪具の持ち込み禁止のための呪具破壊用結界が伊勢経由で張り巡らせているのに入ってくるなんてえ」

付け加えるなら、対人間用に飛鷹さんが放った人間を襲う凶暴な熊やワイヤートラップ。天然ガスが溜まった落とし穴や二酸化炭素を検出して自動で迎撃する迎撃システムなど、一個大隊を余裕であしらえるだけの設備があるのだが、まあ、言う必要はないか。

「……………わたし、鬼」

女の子の言ったセリフに僕たちは啞然とした。

「はっ!?!」

女の子は正座から丁寧にお辞儀をした。

「……………巫山の許嫁。黒雪 湯江。よろしく願います」

「朱鬼 巫山です。こちらこそよろしく願います」

「あ、わたしは犬塚夜知です。特技は宝具作りです」

夜知は耳元でこそそそと囁いてきた。

「巫山あ。本当に許嫁？　もしかしたら頭の弱い人かも。だってさつきも全裸だったし」

「いや、見かけで判断しちゃダメだよ。案外僕が昔会っていたりして……………」

アニメやマンガだと、こういう場合には相手の女の子と昔会っている、記憶をなくしているパターンが非常に多いのだ。まさかとは思

うが、鬼やら結界やらが普通に存在する世界ならそんなことが起こるような気がする。

「ならさっさと思い出しなさいよぉー！」

ぐらぐらと襟を掴まれ揺さぶられていると、女の子
黒雪は
来た、と言って立ち上がった。

「少年ジャンプや最近のマンガにありがちなバトル展開だなあ」

はあ、戦うのは嫌だ。

けど、女の子は戦う気らしく、ぴんつ、と張り詰めた空気が漂う。

「夜知。何かあったら式神に頼らず迎撃システムの警戒レベルを引き上げて地下のシエルターに逃げよう」

夜知の手を取りつつ、おぼろげな記憶から地下に向かう最短ルートを考えていた僕に、夜知は残念そうに言った。

「……巫山は、戦わないんだね」

湯の三

「戦わないよ。だって僕は……」

戦えば夜知すら殺してしまうかもしれない。

最初に鬼の力に魅入られたとき、僕は夜知の父親を殺した。

それは事故だったし、最初から想定されていた必要な犠牲だった。けど、

「娘が、夜知がいるんだ。だ、だからまだ、せめて夜知がひとりで生きていけるまで、待つてくれないか？」

「……………?」
「ああ、夜知は可愛い。自慢の娘だ。きっと母さん似の元気な子になる」

「……………」
「えっ!? だめだ。夜知を身代わりにするなんて出来ない」

「……………」
「ぎあや yアあaがdアaア!!」

…………… 必ず喰われる。だからもう少し喰うのを待つてくれ。

そう言った夜知の父親の皮をはぎ、筋肉を溶かし、生きたまま食べたのは僕だ。

正確に言えば僕に寄生し、何年かに一度、適性のある生きた人間を喰わなければ際限なく増殖し、世界を滅ぼしてしまう『鬼』だ。

「巫山がやる気ないんならしょーがない。逃げよっ!」

僕の手を引き、敵を黒雪に任せたまま、夜知は地下のシエルターへ急いで走る。

当たり前だ。夜知は適性のある犬塚家という以外は、普通の女の子なのだから。

今年、僕に喰われるという運命を背負っている。ただの、女の子だ。

湯の四

「……」

黒雪はふたりが慌てて家を飛び出した後も、部屋の中で立っていた。家にもうひとりの中年の女性

おそらくは夜知と名乗っ

た女の子の母親だろう。彼女を探さずに巫山が逃げたのはわたしと同じ、鬼の力を有しているからだろうと黒雪は判断した。

「そこに隠れている人。出て来てください。さもなければ……」

「あちゃー、ばれてしまったか。まあいいわ。あんさん誰や？ わての狙いは朱鬼の坊主だけやねんけど、しゃーないわ」

ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべている男性に、黒雪は敵ですか？ と聞いた。

「うん？ そうやけど。わてもな、鬼の希少種が欲しいんや。ごめんなあ、ちよっとねーさんの皮はいで被らせてもらえんかな？」

男性の後ろには、五十人以上の人がいた。

しかし、黒雪の目には中身がなんなのかがはっきりと視えていた。

鬼が鬼たる素質のひとつ。

邪気眼。

巫山がいたら中二病とツッコミを入れるだろうが、あいにく今ここにいるのは黒雪と、男性と、人の皮の内側にムカデやクモなどを押し込んで強引に動かしている肉の塊が五十数体だけだった。

その中には、夜知の母親の姿もあった。内部がまだ腐っていないため、比較的新しく作られたものと判断し、黒雪は小さく悪態をついた。

「……変態」

術式は東洋系神道を歪曲して解釈したもの。

理論としては肉体に下等な神を宿らせ、皮の内側までを支配領域とするのだろう。

簡単に言えば操り人形だ。

おそらく男性はその内部に虫を入れることによって、虫の生命力を消費させ神を宿す時間を増やしているのだろうが。

「……ひとつ聞きたい。結界や式神がここを守っていたはずだが、どうやって侵入した？」

男性はなんのことが分からないといったように首を傾げた。

「はて？ なんのことや？」

湯の五

「よオ。お前はここでくたばりやがれ」

夜知と僕が見たのは、半壊した地下シエルターと呪具らしき大剣を持つ青年だった。

右目は眼帯を付けている。問題なのは左目、それは鬼の目だった。彼は鬼だ。

それもかなり強い。

「あの、まさか敵、ですか？」

「……」

夜知は何も言わずに僕らから距離をとった。

犬塚夜知は鬼の戦いでは無力だ。

それが分かっているからこそ、人質になる前に逃げたのだろう。

「どオした？ 戦わねエのか？」

足がすくんで動けない。

失禁しそうだ。

恐い。怖い。

「……」

「なら、こっちから行くぜ！」

青年は残存さえ残らないスピードで近付くと、大剣の柄で僕を殴った。

僕は木をいくつか破壊しながら後ろに吹き飛ばされていく。

誰も傷つけない。

戦いは嫌いだ。

なのに、

「いやあアア！ 離して！」

夜知が隠れていた場所から飛び出て、青年に捕まっていた。

夜知は化粧が億劫で髪がボサボサなことを除けば、かなり可愛い。

青年が何をしようとしているのか、鬼の目は視えてしまう。

湯の六

幻聴。

夜知が叫んだ瞬間。僕は幻聴が聞こえていた。

「助けたいかい？」

助けたい。けど、もし僕がこのまま死ななかつたら、夜知を食べなきゃいけない。じゃないともっと大勢の人が死んじゃうんだ。

「アホだな。さあ決めたまえ」

夜知を救って世界を見捨てるか。

世界のために夜知を喰うか。

「夜知と世界のために、巫山、キミが死ぬか。三択だ」

「……………否。四番目が抜けている」

それはここにいるはずのない人の声で。

白黒のモノクロな巫女服。

そりのない白黒の二本の刀。

艶やかな黒髪と蠟のように白い肌、そして、明るいオレンジ色の特徴的な瞳。

「私は鬼嫁。…………白雪 姫と申します」

死神が舞い降りた。

鬼の1

「神機力ヤノ、神機セツナのどちらで切りたいですか？」

突然現れ、鬼嫁と名乗った白雪は腰のふた振りの刀をそれぞれ片手で持つと、すらっとしたその刀身を青年に見せた。

「お前は何者だ？ まっ、鬼じゃ無さそうだし」

セリフの途中で青年は一気に白雪へと迫った。

青年が使うのは鬼の頑丈さを利用した超高速移動だ。

八百万の神の中には、美の神様もいる。体重を軽くし姿を美しくさせる。青年はこれを応用したのだ。

簡単にいえば、移動の際には体重を軽くして速く動く。殴ったりする際には体重を重くして慣性のままに殴る。

こんな無茶な使い方をすれば、身体はボロボロになるはずだが、青年の人間離れた鬼の身体がそれを可能にしている。

「えっと、決まりましたか？」

ニコツと、白雪は青年の大剣をへし折りながら言った。

「へっ!？」

青年には分からない。

白雪は鬼ではない。

そこに転がっている夜知と同じ、ただの人間だ。

なのになぜ、高速移動中の自分の手から大剣を奪い、へし折るだけの力があるのか？

「簡単ですよ。あなたが私より遅いんです」

白雪は優しく青年を見ているが、オレンジ色の瞳は青年の姿を写してはいなかった。

「大丈夫。落ち込まないでください。あなたはただ”弱いだけ”ですから」

「う、うわあああああ!！」

青年は膝から崩れ落ちた。

「うわー、あの子はえげつないなあ」

夜知は自らの服の残骸を集めつつ、白雪と青年の方を向いた。鬼は人間以上の身体を持つため、人間以上のことが出来て当たり前という風潮がある。

それはプライドというより常識である。今回は青年の得意とするスピードで負けたこともあり、青年がオリンピックピックの選手だとすると、それを赤ん坊が簡単に追い抜いたようなものだ。

「うわあああ！　いつそ殺してくれ！」

当然、自殺したくなるのも分かる。

しかし、白雪はそんな青年に歩み寄った。

「大丈夫ですか？　モブキャラさん」

いまだに名前すら名乗ることが出来ない青年の心をピンポイントでえぐる発言に、更に青年はうなだれた。

「俺なんて、俺なんて、彼女いないから空き時間が増えて鬼の修行がはかどっただけのどーだよ。はあ……………」

「大丈夫。モブキャラさんは強いじゃないですか」

青年の頬に赤みがさした。

「……………もしかして俺のこと、好き？」

「はい、好きですよ」

「えっ、その、ええっ!？」

白雪は純朴な青年にクラスチェンジしたモブキャラが自分に触ろうとするとひよいつとかわした。

「モブキャラさんのこと。好きですよ。……………ゴキブリの次

くらいには」

「……………」

声すらでない。

「大丈夫。あなたはちょっと弱いだけでゴキブリよりは好きですから。安心してこのダンボールみたいに柔らかく脆い大剣と一緒に彼女がいらない空き時間で修行するといいですよ」

「ぎゃあああああああ!！」

青年は大剣の残骸を受け取ることなく、ふらふらと山の中へ消えて行った。

鬼の2

「はああああ！」

「ぐおおおおお！」

男性と黒雪はお互いに素手で戦いあっていた。

呪具はこの辺りでは破壊

恐らくは自壊をさせる結界がはら

れているため、黒雪は丸腰だったのだが、それは相手も同じようで、黒雪は操り人形たちのゾンビのような追撃を避けつつ、男性と肉弾戦を続けていたのだ。

「あんさん。かなりヤル気やないか？」

「はあ、はあ、お前も……………人間のくせに、よくやる」

黒雪は鬼の目で操り人形たちを見て、改めて男性にド変態、と言った。

あのような操り人形は簡単に出来るものではない。

神の憑依や神道のオリジナル理論の構築、そして腐敗し一週間と持たないであろう材料を五十数体も入手しても事件にならない、もしくは事件になっても揉み消せるだけの強力なコネクション。

「……………巫山には近付かせない」

操り人形は所詮操り人形だ。

操っている男性ひとり不倒せばそれで終わる。

それにはやはり、アレしかないのか？

黒雪は一瞬戸惑ったが、しかし次の瞬間には決意をかためた。

「……………遺言」

「??？」

「……………遺言を聞いてあげる。人間が鬼と対等に戦ったからサービス」

「遺言かー、そりゃないわー、ジョーダンキツいわ」

男性は”鬼”という単語でビクツとなりながらも、そうつそぶいてみせた。

「……………ないの？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「行け、わたしに従う亡者たちよ。我が孤独を癒し、我が望みを叶えよ！」

男性の言葉を見殺しして黒雪は右手の親指をかじり、流れ出た血で左手に逆五芒星を描いた。

「なんや、これ……………」

男性に冷や汗が流れる。

男性は黒雪が人間ではないと感じていたが、まさか鬼だとは思っていなかった。

隙があれば逃げる。

それが鬼と人間の戦いにおけるセオリーであり、本来なら男性は黒雪に瞬殺されなければおかしいはずだった。

しかし、黒雪は普通の女の子の体力、反射神経しか持たなかった。ハツタリか？

いや、違う。

単純に人間と戦うタイプの鬼ではないというだけの話だ。

『黒鉄ノ鬼、黒雪 湯江』

自らの身体に封印されている”鬼の力”を開放された。

鬼の3

黒雪の姿はほとんど変わっていないかった。

ただ、その両目が赤く染まり、さっきまでの擦り傷や切り傷がすべて、跡形もなく消え去っている以外は。

「………天気は晴れ。……天照大御神の術式を流用し、対象の破壊用の術式を構築します」

目を閉じ、男性などいないかのように何かを計算している黒雪。

「まちなや!? 即席の術式を戦闘中に作るのはアホやるが!」

男性は当たり前のように操り人形たちを向かわせる。

そう、本来の男性の戦闘スタイルはこれだ。

戦闘は操り人形に任せ、自分は操り人形の制御に全力を注げばいい。

「構築終了。迎撃を開始します」

操り人形たちの攻撃よりも黒雪の回避が一步速かった。

「ちっ!? 爆散や!」

男性が黒雪に一番近い操り人形を爆発させた。

神は憑依する対象を失い操ることは出来なくなるが、中身のほとんどは猛毒を持つ虫たちだ。

黒雪に降りかかれば、黒雪はすぐに死に至るだろう。

「本当は鬼用になるべく温存したかつんやけどなー、かんにんな」

「………いいえ」

爆発で土ぼこりが舞い、悪くなっている視界から黒雪の声がした。

「今のわたしに天照大御神より下級の神や悪霊、怪異は通じません」
土ぼこりが風に流され、黒雪が男性に向かって歩いてきた。

黒雪は術式を構築する前とは違い金色の十二単のようなものを着ているが、金のはではでしさはない。

むしろ、神の色とでも言うべきだろうか。

「………神道の御祓みそぎを解釈し、わたしが太陽の光を浴びている間はわたしやわたしの金孔雀に触れた、天照大御神より下位の神や霊

を穢れとして御祓ます』

金孔雀とはあの十二単モドキのことだろう。

操り人形は下位の神に該当するだろうから使えない。同じく虫も神に間接的にでも関わったことで霊と判断され、穢れとして御祓で祓われた。

「勝ち目ないなあ、じゃッ、逃げるわ！」

男性はくるっと反転すると、操り人形を引き連れて逃げようとした。マンガやゲームじゃあるまいし、勝てない敵が居たら逃げる。

逃げるが勝ち。これは社会の常識だ。

『……逃がさない』

だが、そういう敵に限って逃げるのがとても難しかったりする。

黒雪は逃げ遅れた操り人形のひとりに触れ、操り人形が御祓で崩れ落ちる前に細工をした。

『……爆破』

次の瞬間、操り人形のひとりから解析した術式を利用して、体力が途中で尽き、操り人形に背負われながら逃げている男性の指示とは無関係に、近くの生き物を殺す爆発が起こった。

当然、護衛も兼ねて操り人形の近くにいた男性は即死した。

鬼の4

「五、五マス進む。……………巫山は痴漢容疑を掛けられた。賠償金として三万円銀行に払う」

「三。……………白雪は人生の墓場を体験した。左隣りのプレイヤーと結婚式する」

「左隣り。……………って黒雪。あなたじゃないですか!？ 女の子同志で恋愛なんておかしいですよ」

「そうそう。姐さんは俺と結婚式をあげましょう。リアル《現実》で」

「沼津。斬りますよ?」

「喜《悦》んで! むしろご褒美です!」
はあー。

僕の目の前ではさつき大剣で僕を半殺しにしかけた青年が、その右隣りには黒雪。その左側には白雪さん。そして夜知と僕の五人で人生ゲームをしていた。

……………うん?

どうしてこうなったんだろう。

話は三十分前に遡る。

三十分前。

「……………ふ……………さん。……………ざさん。巫山さん。起きてください」

「う、ううん」

頭が痛い。

額が割れて血が流れていたらしく、顔に何本も血の通った血の塊の筋が出来ていた。

過去形なのはすでに跡形もなく治っているからだ。

相変わらずの人間離れた再生力。

ただ僕が鬼じゃない。

鬼に寄生された、ただの人間だ。

鬼になりきれず、人間を喰らって衝動を抑えるだけの。

「僕は、まだ人間だ」

鬼の5

「…………どうしたの」

黒雪が不思議そうに首を傾げた。

黒雪の服は傷だらけなのに、黒雪自身は傷ひとつ負っていないのを見て、やっぱり彼女も鬼なんだなと実感した。

「黒雪。ここはどこだ？ 僕は…………」

ふらつく頭を押さえつけ、僕は…………。

「夜知！？ 黒雪ッ！ 夜知は、夜知はどこだ！！」

夜知が……………絶叫して、僕は誰かと話していて、白い髪の女の子が…………。

「夜知さんなら大丈夫ですよ。ちゃんと生きています」

ふわっと、柔らかい何かが顔に当たった。

「ハンカチ。血を拭き取った方がいいと思います」

ハンカチで顔を拭く。

特徴的な白黒の巫女服。白雪姫と名乗った女の子だ。

「…………白雪。何故あなたがここにいるの？」

黒雪は彼女の知り合いのようで、自分の服と彼女の白黒の巫女服を見比べている。

「なんでと言われても…………。私は朱鬼を封印するために来ただけですよ？」

彼女の意外なセリフに場が凍りつく。

僕や夜知たちがこれまで生涯をかけても分からなかった方法。

朱鬼の封印。

そんなことが出来るのか？

「…………朱鬼を封印…………つまり、巫山を殺すということ？」

黒雪は右手の親指をかじりかけていた。そういうクセでもあるのだろう。

「んー？ 状況を整理しましょう。だってほら、巫山さんは黒雪さ

んや私のことをなんにも知らないっぽいので
彼女はそう言っていたはずらっぽく笑った。

「白雪。キミは何も」

何者だ？ と聞こうとして、ズンツと空気が重くなったのを感じた。
例えるなら、葬式の最中。

親が死ぬ寸前。

銃口を向けられた瞬間。

身体に液体の水銀や鉛がまとわりつくような不快感。

「白雪さん、もしくは白雪さま。そう呼んでくださいね」

初対面の相手にさま付けを強要するなんて、新手的ジョークか何か
だろうか？

「……白雪は真剣^{マツ}。ジョークや冗談は言わない」

黒雪の目は真剣そのもので、僕は無難な呼び方で彼女を呼ぶことに
した。

「白雪さん。とりあえず知っていること全て教えてください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9021z/>

鬼嫁～湯煙らない殺人鬼～

2011年12月30日02時50分発行